

留学生の求めていること

—研修コース修了生インタビュー調査報告—

守山 恵子*・永井智香子**・松本久美子**

1. はじめに
 2. 調査の概要
 3. 研修コース
 - 3-1 研修コース全体の評価
 - 3-2 研修コースのクラス別評価
 - 3-3 「専門の発表」について
 - 3-4 研修コース在籍中の人間関係
 - 3-5 研修コース在籍中に困ったこと
 - 3-6 まとめと考察
 4. 専門の研究開始以降
 - 4-1 日本語の勉強を続けているか
 - 4-2 研修コース修了後日本語はどのくらい必要か
 - 4-3 専門の研究が始まってから困ったことがあるか
 - 4-4 まとめと考察
 5. 支援体制
 - 5-1 チューターについて
 - 5-2 専門の研究で困ったことや聞きたいことがあるときはどうしているか
 - 5-3 日常生活で困ったことや聞きたいことがあるときはどうしているか
 - 5-4 まとめと考察
 6. おわりに
- 資料

1. はじめに

長崎大学留学生センターでは、1996年の後期から、毎期、国費研究留学生と教員研修留学生を主な対象¹⁾に、日本語を集中的に学ぶ日本語研修コースを開講してきた。これまで、研修コース終了直後には、研修コースについてのアンケート調査を行って研修コースの改善に役立ててきたが、修了生のその後の状況については必ずしも十分に把握していなかった。大学院での専門の研究をはじめてしばらくたった学生たちが、現在、研修コースをどう評価しているのか、日本語使用状況はどうか、どんな問題を抱えているのか、どう困難を克服してきたのか、新たな環境にどう適応してきたのか等を詳しく知ることが、研修コースの一層の改善のためにも、学生への指導相談を充実させるためにも重要であると考えた。

研修コース修了生を対象とした調査は、他大学の留学生センターでも行われており、報告書も出されている²⁾。しかし、それらのほとんどはアンケート調査である。研修コースで学ぶ学生たちは、来日直後からかなりの時間を留学生センターで過ごすこともあって、教官や事務官との間に親密な信頼関係が成立することが多い。そこで、インタビュー調査であればアンケート調査では隠れてしまう細かなニュアンスや、質問者が意図しなかったような答えが得られると考えた。今後のセンターのコースを考えるうえにも、指導相談部門の充実を図るうえにも、また、学生たちをさらにサポートし、様々な問題への対応を考えるうえにもインタビュー調査が有効であると思われたのである。現在第8期が開講中であるが、第10期という節目を前にまた、第1期研修コース修了生が帰国し始める前に、インタビュー調査を始めることが必要であると考えた。

2. 調査の概要

「研修コース」「専門の研究」「日常生活」「支援体制」の四つをインタビュー調査の柱とした。インタビュー調査項目を決定するに当たっては、他大学のアンケート調査を参考にしながら筆者らで話し合い、予備調査項目を選択した。2名に対して予備調査を行い、予備調査の結果をふまえて修正し、最終的に調査項目を決定した。(資料1)

調査時期は1999年2月～2000年3月で、調査場所は落ち着いて話せる教官研究室、学生の部屋などを使った。対象者は研修コース修了生の第1期生か

ら第4期生の26名³⁾である。

インタビューは、筆者ら3名で行った。1名がインタビューを、もう1名が記録をした。残りの1名は聞きもらしなどがなかったかをチェックした。また、すべてのインタビューは学生の承諾を得て、テープに録音した。インタビューは、一人につき約1時間から1時間半かかった。最初にインタビューの目的を説明し、日本語の能力を確かめたり判定するためではないので、日本語でも英語でも答えやすい方で答えるよう伝えた。質問は、基本的に日本語で行った。意味が分からない場合は言い方を変えて説明し、それでも不十分な場合にのみ英語を使用することとしたが、質問に英語を使用しなければならなかったことはほとんどなかった。ほとんど英語で答えた学生が1名いたが、それ以外の学生は不十分な点を英語で補った程度であった。

以下に「研修コース」「専門の研究開始以降」「支援体制」の三つの観点からインタビュー調査の結果を報告する。(学生の回答を引用する場合は、文法の間違いや言葉の重なりなどは訂正した。また、() のローマ数字は期を表し、日本語既習者の場合のみ「既習」とした)

3. 研修コース

研修コースについての質問を通して、研修コース全体と、それぞれのクラスを学生に振り返ってもらった。(各期のスケジュールは資料2) すぐには研修コース時代のことをはっきりと思い出せない学生には、思い出すきっかけにするために、研修コースにどんなクラスがあったかを調査者側から示した。学生たちは、約1時間という長時間にわたるインタビュー調査にも関わらず積極的に応じ、大変協力的であった。

3-1 研修コース全体の評価

3-1-1 全体の印象

全体の印象として「よかった」と答えた学生は26名のうち8名であった。しかし、これらの学生も質問を重ねるうちに、ゆっくり思い出しながら、それぞれのクラスについて意見を述べており、「よかった」一言で終わっているわけではない。また、残りの18名の学生は全体的な評価には言及せずに、個別のクラスについての意見を述べている。

3-1-2 研修コースの期間について

長崎大学留学生センターでは研修コースは15週ないしは16週で行ってきた。その期間については、5名の学生が言及している。4名が「もう少し長い方がいい」(Ⅳ)と考えている。具体的には、「20週ぐらいの方がいい」(Ⅳ)という意見があった。また、4名のうちの1名は「期間を長くして一日のクラス数を減らし、専門の研究と平行して日本語を学習したい」(Ⅳ)と答えた。また「日本語と研究室での研究が同時の方がいい。教室で習ったことを研究室で試すことができる。本当の日本語に触れることができる。インテンシブコースはもっとリラックスしたかった」(Ⅳ)という意見があった。この意見は「日本語のクラスの進度が速すぎた」という意見につながる。日本語の学習が来日の本来の目的ではないのに日本語学習ばかりさせられていると感じ、「日本語学習のストレスが大きすぎた」(Ⅳ)と言う学生もいた。「研修コースの期間はちょうどよかった」と答えた学生に理由をきいてみると「専門の研究には日本語が必要ではなく、早く専門の研究に集中したいから、このくらいの期間がちょうどよかった」(Ⅳ)という答えがかえってきた。

3-2 研修コースのクラス別評価

3-2-1 主教材『新日本語の基礎』を使うクラス⁴⁾

研修コースのなかで、最も時間数も多いこのクラスについては、肯定的な意見がほとんどであった。具体的には、次のような意見があった。

「先生たちは簡単な言葉で教えてくれた。教え方がよかった」(Ⅰ)

「(研修コースのあと)日本語を使ったとき、いいコースだと思った。コースの途中では、レベルがわからなかった。あとで、実際に使ったとき、いいコースだと思った」(Ⅱ)

「先生たちは上手に教える」(Ⅱ)

「日本語のパターン、使い方をいろいろな先生に教えてもらった」(Ⅲ)

「インテンシブコースは大切で、これがなかったら、日本語はできるようにならなかった」(Ⅳ)

しかし、「専門の日本語については十分ではなかった。専門は自分でがんばらなくてはならない。6ヶ月は基礎的日本語だけしかできないから仕方がない」(Ⅱ)と専門日本語の必要性にふれた学生もいた。

日本語クラスの進度について言及した学生は4名だが、いずれも「速すぎた」

と感じている。この4名のうち、ゼロスタートだった3名は、4月から9月に在籍した学生である。いつの期でも、在籍中から「速い」と言う学生がいるが、特に4月から9月（前期）に研修コースで学ぶ学生は、ゴールデンウィークはあるものの、そのあと、7月末までまとまった休みがなく、消化不良を起こしやすいのかもしれない。ある前期在籍の学生は「まんなかぐらいに休みがあると…」(Ⅱ)と述べた。しかし、後期在籍の学生で「間に休みがあってよくなかった」(Ⅲ)と言った学生もいた。

3-2-2 主教材以外のクラス

今回インタビューの対象とした1期から4期の学生は『新日本語の基礎』を使うクラス以外に「日本語演習Ⅰ」（日本人学生との会話のクラスで2期より開始）⁵⁾、「日本語演習Ⅱ」（サバイバル日本語のクラスで4期より開始）、「作文のクラス」、「漢字のクラス」、「スポーツのクラス」（1期、2期のみ）「コンピュータのクラス」、「日本の伝統文化のクラス」（日本舞踊、華道、着物など）、「日本の社会と文化」（英語で行われるクラスで、1期から4期まで開講）のクラスを受けていた。

「もっと会話の練習をしたかった」と11名の学生が指摘した。「日本語演習Ⅰ」は日本人学生と会話をするクラスだが、このクラスについて「会話のクラスがよかった」とした学生がいた反面、「日本人学生と話すのでは、なかなか間違えを直してもらえない。分からないことを説明してもらえない。先生と授業の中で会話の練習がしたい」(Ⅲ)などという意見があった。

4期から「日本語演習Ⅱ」としてサバイバル日本語や生活漢字を教えるクラスを開講しているが、4期以前の学生から生活に密着した知識がもっとほしかったという意見があった。たとえば、次のようなものである。

「手紙の書き方を教えるクラスとか、いろいろなフォーマットに記入するためのクラスとか、あるいは“生協半額”、“一割引”などという生活に役立つ情報を教えてくれるクラスがあればいい」(Ⅰ)

「旅行に行ったとき、駅のサインは全部漢字でわからない。生活の漢字をしてほしい」(Ⅱ)

「漢字クラス」については、専門の研究を始めてから漢字で苦勞しているためか「もっとたくさんの漢字を勉強したかった」という意見が目立った。「研修コースのあとも続けて漢字を勉強したい」(Ⅲ)という意見からは補講コー

スに中級レベルの漢字クラスが必要なことがうかがえる。一方で、「専門の漢字は日本人も読めないことがある。留学生は本当にマスターできるのか」(Ⅲ)と漢字の学習を疑問視している学生もいた。

「コンピュータのクラス」を不要としたものは10名に上った。日本語だけで説明する「コンピュータのクラス」は理解できないと欠席する学生が少なくなかった。また、多くの学生にとっては、「ワードとかエクセルはもう知っていた」(Ⅳ)「基礎はみんな知っていた」(Ⅲ、既習)と内容にも不満があったようだ。

よかったクラスとして特に「着物」「踊り」「生け花」「書道」などの「日本の伝統文化のクラス」をあげた学生が5名いた。このクラスについては次のような意見があった。

「文化のクラスはよかった。でも、場所が変わった方がいい。雰囲気も大切」
(Ⅱ)

「スポーツ、着物、生け花などもリラックスする時間で、楽しみだった」
(Ⅲ)

「もっと文化の勉強したかった」(Ⅱ)

「もっとほしいのは伝統文化のクラス、専門になってからはチャンスがない」
(Ⅳ、既習)

英語で行われた「日本の社会と文化のクラス」の評価は両極端である。「おもしろいトピックがあった。英語で話したから本当に言いたいことが言えた」(Ⅱ)という意見があった反面、「文化のクラスは知識だけのことが多い」(Ⅱ)と不要だとした学生もいた。当然のことながら英語が不得意な学生は評価していない。

「スポーツのクラス」であるが、「スポーツのクラスは役に立たないと思ったけど、健康のためによかった」(Ⅲ)などと評価をした学生も2名いたが、「スポーツのクラスはどうしてあったのかわからない」(Ⅱ)などと3名が不要とした。不要であると指摘した学生は多くはないが、実際には「スポーツのクラス」も欠席が多かった。

このようなクラスがあればと指摘されたものとして、発音のクラスと専門に密着したクラスがあった。「水産関係のものを読むクラスがあればよかった」(Ⅰ)「専門の言葉を勉強したかった」(Ⅳ)などという声があった。

3-3 「専門の発表」について

第1期から研修コース修了時に、すべての学生が自分の専門について短いスピーチをする「専門の発表」を行っている。26名中21名の学生が「役に立った」あるいは「いい経験になった」と積極的に評価している。具体的には次のような意見があった。

「大学院にはいるときのテストに役に立った」(Ⅰ)

「授業の時何度も発表しなければならない。それに役に立った」(Ⅰ)

「日本語と専門のことはじめてあわせるときだったから、よかった」(Ⅱ)

「便利。何をしていますかと聞かれたとき、発表と同じことを言った」(Ⅱ)

「いろいろな言葉があとで役に立った」(Ⅱ)

「今、研究室でゼミで発表することがある。そのとき「専門の発表」のスタイルを使う」(Ⅱ)

「マスターの試験は日本語だったから、その面接にもテストにも「専門の発表」が役に立った」(Ⅱ)

「いろいろな専門の言葉、文法、とても役に立った」(Ⅱ)

「いろいろなパターンとかやりかたが役に立った」(Ⅲ)

「自信になった。日本の学生に説明する時役に立つ」(Ⅲ)

「発表の時の専門の言葉は今でも覚えている」(Ⅲ)

「質問がよかった。練習になった」(Ⅲ)

「専門の先生と情報交換ができた」(Ⅳ)

「日本語の文章の作り方が分かり始めた」(Ⅳ)

このように「「専門の発表」が自信になった」「専門の語彙を覚えたのが役に立っている」「発表の仕方を学んだ」さらに「その準備をきっかけに専門の先生とのやりとりが深まった」などの肯定的な意見が多い。実際に準備する時間は2～3日しかないが、日本語のクラスで落ち込んでいた学生が自信を取り戻すいいチャンスにもなっているようだ。多くの学生が自分のことばかりでなく、クラスメイトの発表の内容や準備期間、発表当日のことをよく覚えている。

数は少なかったが5名の学生が「あまり役に立たなかった」としている。たとえば、次のように語った。

「忘れてしまった」(Ⅲ)

「ごく基礎的なことだけについて発表したのであまり役に立っていない」(Ⅲ)

「今の研究では全く使っていない。研究のことは全部英語でしている」(Ⅲ)

「覚えられなくて読んだ。あとで、全部忘れた」(Ⅳ)

3-4 研修コース在籍中の人間関係

すべての学生が大変肯定的に、いい人間関係を築くことができたことたえている。研修コース受講時には、一緒にテストの勉強をしたり、遊んだり、外出したりした学生も少なくない。「毎日会っていて、(同じ苦勞をしたので)同じ気持ちだった」(Ⅱ) また、研修コースを終了したあとも、「友だち」であるという意識を強く持っていることが伺える。進学した大学が違ってよく会っている学生がいたり、専門分野が近い学生の研究室をたずねあったり、メールで連絡を取ったり、電話をしたりする学生もいて、「兄弟のような気がする」(Ⅲ)と言った学生もいる。困ったときにお金を借りたのも同期の学生だったり、今でも買い物と一緒に行く学生や、引っ越しを手伝ってもらった学生もいる。必ずしもよく連絡を取り合ったり、会ったりしているとは限らないが、「会ったらうれしい」(Ⅳ)「あったらたくさん話す」(Ⅲ)という言葉によく表れているように、研修コース受講時の人間関係がその後の留學生活の精神的な助けにもなっているようだ。

3-5 研修コース在籍中に困ったこと

「ホームシック」と答えたものが13名いた。それをどう乗り越えたのかを聞いてみると、「1ヶ月ぐらいしてからよくなった」(Ⅲ)「時々あるけど慣れた」(Ⅰ)などと、時が解決したと答えたものや、時が解決するのをじっと待った学生もいた。また、ホームシックを忘れるために勉強やスポーツをしたと答えた学生もいた。さらに「同じ国の友だちや先生と話をした」(Ⅰ)「先生に相談して助けてもらった」(Ⅱ)「友だちがいたからだいじょうぶだった」(Ⅱ)「ホームステイに行った」(Ⅱ)と身近にいる人に支えてもらったり、電話やメールで国の家族や友だちと話すことで乗り越えた学生も多いことがわかった。

研修コース在籍中には大きな問題となるような困ったことはなかったとした学生がほとんどだった。センターで事務の人にも教官にも十分サポートしてもらったと11名の学生が答えている。しかし、研修コースを修了して研究生や大学院生になった途端、それまで受けていた助けが受けられなくなり、そのギャップにかえってとまどったと語った学生が3名いた。3名とも研修コース終了

後他大学に移った学生であった。

3-6 まとめと考察

学生たちの評価と要望をまとめてみると、以下のようなことがわかる。

研修コースの期間については、もう少し長くしてほしいという声が多かったと言える。ただし、この程度でちょうどよかったという声もあったことから、学生のニーズに合わせて、選択できるようであればさらによいと思われる。

日本語のコースについては、おおむね肯定的な評価であった。ゼロスタートの学生ほど、自分の進歩をはっきりと感ずることができたのだろう。進度が速いと感じられ、それがストレスになっている学生もおり、「専門の研究を始める前に、もう少しリラックスしたかった」とした学生もいた。「専門の研究を同時に始めたい」とした学生もいたが、日本語の学習だけをしていると「自分がバカになったように感じる」ことがあり、専門の研究を始めればプライドを取り戻せるように感じ、時間的には忙しくても、そのことが助けになると思うのかもしれない。また、教室の中の日本語だけでは、本当の日本語ではないと感じている学生もいた。研究室などで日本人学生との間で普通に使われている日本語と教室で習った日本語の間にギャップを感じたのかもしれない。「会話の練習を十分にしたかった」と言う学生が多かったのも、実際の場面で少しでもスムーズに日本語で会話をしたいという願いがあるのだろう。

漢字については、学生の専門によって必要性が違うが、わずかの漢字を学ぶだけでは実際の役に立たないと感じている学生が多かった。多くの学生が指摘した「コンピュータのクラス」については、日本人学生対象の初心者向けクラスとほぼ同じ内容のクラスだったため、不満も多かったと思われる。

「日本の伝統文化のクラス」については、学生の評価がはっきりと分かれた。評価している学生の中には、これらのクラスをさらに充実させることを望んでいる学生もいた。しかし一方で、ほとんど評価していない学生もおり、研修コースの中での扱いを十分検討する必要があるだろう。「日本の社会と文化のクラス」についても同じことが言える。

「スポーツのクラス」は、学部学生ならいざ知らず、研修コースの学生には不要だということがはっきりした。学生は時間があるときに、それぞれ自

分の好きなことを仲間を見つけてしているようだ。

「専門の発表」は、研修コースの締めくくりとして、研修コースと専門の研究の橋渡しとして、また、学生の自信回復のためにも役に立っていることがわかった。「専門の発表」と「読解作文」の時間に書いた作文を冊子にし、研修コースの目に見える形での成果として残している。このことに触れた学生はいなかったが、自分が日本語で書いたものが冊子になっているのを目にし、手にしたときの学生たちのうれしそうな表情を思い浮かべると、これもまた、意味があることだと感じている。

学生たちはときにホームシックになったり、学習不振に悩んだり、さまざまな問題をかかえたりする場合もある。研修コース在籍中は、教職員からもクラスメイトからも十分なサポートを受け、大きな問題なく乗り越えてきていることが伺えた。

来日当初の不安などを最小限にしようと、留学生センターの事務官、教官が親身に世話をすると、それが当たり前になり、センターを離れたときに学生をかえってとまどわせることになることがあることもわかった。留学生センターで研修コースを終了したあとも長崎大学で研究生活を送る学生は、他の人に相談できなかつたり、相談する相手がいないと留学生センターへ相談に来るが、他大学に移った学生は、よく知った相談できる人がおらず、余計にギャップを感じるのだろう。しかし、今後は、佐賀大学に留学生センターができ、研修コースに他大学進学者が配属される可能性が減るため、終了後の独り立ちをことさら心配する必要もなくなるかもしれない。

研修コースは、これまで改善を続けてきており、このインタビュー調査で明らかになった学生たちの希望に添った形での改善がすでになされていることも多い。

研修コースの期間については、夏期、春期の全学の学生を対象とした特別補講コース（3週間）を研修コース終了直後に続けて開講している。1コマ90分のクラスを週に6コマ程度であるが、日本語の学習を続けたい学生は続けられるシステムができている。補講コース（全学の留学生対象）のクラスの程度も、研修コース修了生が続けて学ぶのに適当なレベルのクラスが開講されており、研修コースが短いと感じる学生のニーズに応えている。

また、前期に在籍する学生たちの中に、「真ん中ぐらいに休みがあると」という意見があった。休みにはならないが、以前はコース終了直後に行っていた

一泊二日の研修旅行を、気分転換とクラスの親睦のために、学期の中程で金曜日から土曜日にかけて実施している。

日本語学習と研究の両立という点については、長崎大学へ進学する学生の場合、指導教官の考え方によっては同時に研究を始める事例もあったが、学生も指摘していたように、一日の日本語学習の時間を減らさなければ、両立はなかなか難しいと思われる。留学生センターとしては、研修コースの期間は日本語学習に集中するよう指導し、指導教官にも理解を求めている。

「日本語演習Ⅰ」での日本人学生との会話も、每期改善が続けられており、また、ほとんどの学生は会話パートナー（5-4参照）を得て、個人レベルでクラス外で会話の練習を続けている。

「日本語演習Ⅱ」では、生活に密着したすぐに役に立つ日本語を扱っており、このクラスの充実が毎日の生活での学生のとまどいや不安解消にも役に立つのではないかと思われる。このクラスも、学生の必要に添って扱う内容などを期ごとに見直している。

「漢字クラス」は、4期目から独立した漢字クラスとなり、研修コース修了後の自学も視野に入れた漢字指導がなされている⁶⁾。全学を対象としたクラスの中には、研修コース終了後続けて漢字を学ぶことができるクラスはないが、留学生それぞれが自学できるように指導することで、専門に応じて必要な漢字学習を続けてくれればと考えている。また、どの程度までを研修コースで扱うべきか、扱えるかは簡単には言えないが、現在は約300字を研修コース中に学習している。

「コンピュータのクラス」も大幅に改善され、留学生センター内部のコンピュータ室が充実した第6期以降、日本語の学習と研修コース終了時の「専門の発表」に焦点を当てた「コンピュータのクラス」（「日本語演習Ⅲ」）が留学生センター専任教官によって開講されている。このことによって、学生から不満を聞かされることがほとんどなくなった。

「日本の伝統文化のクラス」は、現在は日本舞踊、華道、着物を各一回、書道を二回行っている。「伝統文化のクラス」は研修コースの主目的からははずれるし、学生の評価もはっきりと分かれることから、さらに学びたい学生に対しては学外のクラスなどの情報を提供することができれば、十分だと考えている。また、英語で行われていた「日本の社会と文化」のクラスも学生の評価がはっきりと分かれたこともあり、現在は行われていない。

第1期から第4期目までの学生にインタビューした結果、留学生センター立ち上げ当時は、設備の面でもカリキュラムの面でも手探りで、学生たちの不満を十分解消できなかった面もあったことがわかる。しかし、現在に至るまで、学期毎に研修コース全体を改善することに力を注いできた結果、指摘されたことの多くはすでに改善されており、これまでの改善の方向はおおむね正しかったと言えるだろう。今後は、特に、異なった要求を持った多用な留学生に対して、個別に対応する場合のシステム作りを考える必要があるだろう。学生の回答からも明らかのように、学生の要求は専門によって、日本語に対する考え方によって、学習者個人の日本語能力によって、育った文化によって、性格によって、様々である。これまでは個々の学生の問題には教官がその場その場で個人的に対応してきたが、学習カウンセリング面でも指導相談面でも個別に対応する場合のノウハウを蓄積し、システムを作っていくことが今後の課題だと思われる。

4. 専門の研究開始以降

4-1 日本語の勉強を続けているか

今回インタビューを試みた26名のうち現在日本語の勉強を「していない」あるいは「あまりしていない」と答えたものは12名である。およそ半数が日本語の勉強をしていないことになる。その理由としては「時間がない」というものが大半を占めるが、次のような回答もあった。

「日本語の勉強が好きですかときかれましたそれは好きではない。私は実際の場面でそこにいる人間と接するのが好き。たとえば、日本語のクラスという作られた場での学習には興味がない。だから、センターで開講されているコースが受けられるとわかっていても受けない。毎日の研究室での実際の生きた会話が勉強になるから」(IV)

この学生はインタビューのあいだ、教室の中での日本語と教室外での日本語の差にとまどい続けていたと何度も訴えた。

4-1-1 自分で日本語の勉強を続けている

「専門の研究が始まると忙しいので日本語の勉強をする時間がない」というものが多いことはある程度予想がついたが、「自分で日本語の勉強を続けている」という者が8名いた。当然のことながら自分で辞書をひいたり、研究室の

日本人に聞いたりしながら専門の言葉や漢字を勉強しているというものが多
い。それぞれ工夫して勉強していることが次のような回答から伺える。

「いろいろな方法で、自分で勉強している。テレビ見たり、友達と話す。新
しい言葉をローマ字でメモして辞書引いたり、日本人にきいたりする。文
法は前の教科書やノートをチェックする。『新日本語の基礎』の最後のま
とめの部分をコピーして参照、復習している。日本のテレビドラマを見な
がら夕食を作る」(Ⅳ)

「『バイオテクノロジーの漢字』で勉強している」(Ⅱ)

「コースに入って続けていないが、自分で勉強を続けている。
『KANJI-KANA』などを使っている。それから専門の雑誌『トランジスタ
ー入門』を自分のために翻訳してみたりしている」(Ⅳ)

「専門の本読んだり、新聞の記事を読んだりしている。わからないときは
『日本語文型辞典』をみている」(Ⅳ 既習)

また、日本語能力試験を受けてみたという者が2名いた。たとえば次のよう
な答えである。

「日本語能力試験を受けた。2年前3級の試験はだめだった。リスニングは
よかったが漢字がだめだった。去年もう一回3級にトライしたけど、結果
はまだ分からない」(Ⅱ)

4-1-2 補講コースで日本語の勉強を続けている

センターで開講している補講コースで日本語の勉強を続けているというもの
は意外に少なく4名であった(佐賀大学へ行った学生は佐賀大学で開講されて
いる日本語のコース)。しかしながら「実験のストレスからの開放になる」(Ⅱ)、
「専門の勉強から離れてリラックスできる」(Ⅳ)という言葉からもわかるよう
に補講コースを受講することには気分転換という効果もあるようだ。

4-2 研修コース終了後日本語はどのくらい必要か

ほとんどの者が「修士論文、または博士論文は英語で書く」と述べている。
しかし、学位論文を英語で書くからといって日本語の必要性が低いとは言えな
い。インタビューより日本語と格闘しているさまざまな姿が浮き彫りになっ
た。

4-2-1 指導教官との会話

「指導教官とは日本語だけ、あるいはほとんど日本語で話す」という者は14名と全体の約半分である。残りの者は英語で話すことが多いとのことである。また、指導教官以外の人たち、つまり、日本人の院生、学部生、との会話となると26名のうち23名が「日本語で話す」と答えた。ただ、「ある院生は英語を話したいらしいので仕方なく英語で話す」(I)という言葉からわかるように留学生を英語の練習相手としている日本人もいるようである。

4-2-2 授業、発表、レポートで使われる言葉

博士課程で授業がないと答えたものを除くと医学部の学生以外はほぼ全員が「日本語で授業を受けている」と答えた。ゼミの発表についても医学部の学生以外はほぼ全員が「日本語である」と答えた。ただし「使う本の半分は英語」「基本的にテキストは英語」「日本語の専門用語がわからなかったらカタカナや英語を使う」など何らかの形で英語を使用していることが多い。レポートになると経済学部の大学院に進学した一部の学生や水産学部の学生1名を除き英語で書いていることがわかった。

4-2-3 言葉の壁の克服

研修コース終了後、つまり初級日本語が終了した直後に、日本語だけで発表したり日本語での専門の授業を理解するというのは至難の業である。この言葉の壁を乗り越えるには本人の努力と周囲の助けが不可欠である。そのことは次の言葉からもよくわかる。

「理工学部で検討会が毎週ある。2週間に1回発表しなければならない。最初の1年は英語で発表した。今年の3月から日本語で発表している。日常会話はもちろん日本語。だから検討会の発表もどうしても日本語でしたいと思っていた。しかし、ボキャブラリーも足りなかったし、専門用語の使いかたも分からなかった」(I 既習)

「最初から全部日本語だった。クラスメートもいろんなことを教えてくれた。最初は大変だったけど、だんだん日本語だけ使う環境に慣れた。日本語を使わないと話せないので仕方ない。授業も全部日本語。使う本は日本語の本もあったけど、英語のもあった。レポートは半々ぐらい」(II)

「日本語は本当に必要。毎日話すときとか、ほとんどの研究室の人は学生だ

から日本語は必要。英語が話せる人がいないから日本語で話さないとちょっと困る。ゼミのときは全部日本語。あまりわからないが、先生と研究室の友達とか手伝ってくれた」(Ⅱ)

「ゼミのときは日本語。研究室の日本人とも日本語。意味はわかる。日本語のレポートは友達に助けてもらう。テキストは全部日本語。日本人が助けてくれる」(Ⅱ)

4-2-4 比較的短期間で専門日本語に慣れる

留学生にとって専門に関しては国で十分に母語や英語で勉強してきているので知識は十分にある。問題は日本語である。ただ授業内容や専門の論文などを理解するのに不可欠な日本語の専門用語がわかるようになると比較的短期間で専門の研究における日本語の環境になれるようである。たとえば、次のような留学生の言葉がそのことを物語っている。

「…授業もちろん全部日本語。はじめはぜんぜんわからなかったが、だんだんわかるようになった。40パーセントくらいしかわからないけど、私にとってはそれで十分」(Ⅳ)

4-3 専門の研究が始まってから困っていることがあるか

4-3-1 研究室の人間関係

まず、研究室の人間関係についてであるが、深刻な人間関係の問題で悩んでいると答えたものはいなかったが、やはり、日本の先生と学生の関係のあり方や先輩・後輩の関係に対して違和感や嫌悪感を持つという意見が目立った。たとえば、次のような意見がそのことをよく表している。

「修士1年生のとき先輩後輩の関係があまり好きじゃなかった。私の国にはない。もちろん先輩後輩はあるけど、仕事や実験は同じレベル」(Ⅰ)

「…私の国では先生とももっと近い関係にある」(Ⅱ)

また、学生という立場になかなか慣れることができなかつたと訴えたものもいた。

「ときどき先生にしかられた。でもそのとき、先生は私のためにおこっていることがわからなかった。今はよくわかった。実は私は国では学生じゃなかった。最初は学生という立場に慣れなかった。」(Ⅳ)

この言葉からよくわかるが、研修コースに参加する学生は来日前、国で一人

前の研究者であったり、比較的高い地位にいたりした者もいる。そういう者が急に学生という立場になると、最初のうちその立場の違いにとまどうのである。

4-3-2 設備について

設備については22名から回答が得られたが、その内「問題がない」と答えたものは16名であった。「実験などに足りないものがあつた場合すぐ購入してもらえ」と答えた者もこの16名の中に含まれている。「設備が不十分である」と答えた6名のうち「部屋が小さくて、ドクターの学生のための机もない」「院生の研究室にコンピュータがない」という研究環境に関する不満を訴えたものが4名で、残りの2名は直接実験に関わる設備についてのものであつた。それらは次のようなことである。

「実験用の動物が高価で、機械はあつても材料が足りない」(IV)

「いちばん困っているのは研究。研究の将来も見えない。研究はおもしろいけど設備が悪い。他の留学生もよく設備の悪さについて話している。日本人の学生は設備の悪さがまだわかっていない。そこで、他の研究室へ行くけど、たくさん待たないと使わせてもらえない」(IV)

このように設備に関してはほとんどの者は問題を感じていないが、学生によっては苦勞している者もいることがわかつた。

4-3-3 日本語の問題

以上、人間関係と設備について見てきたが、それ以外に専門の研究が始まってからどのようなような困難に出会つたかという点では、やはり、日本語に関することを訴えた者が多かつた。たとえば、次のようなことである。

「私は修士論文を日本語で書かなければならない。それは困ることだ。がんばるしかない。今は助けてくれる人がいない。今、必要なのは漢字を読むことだけ」(I)

「最初は日本語の言葉がわからなかつた。医学部の言葉はたくさんあるから漢字も時々わからない。それがいちばん困つた。今はだんだんわかつてきた。いちばんの問題は日本語が読めないこと。いい本がたくさんあるけど読めない。日本人はみんな絵のたくさんついた翻訳書で勉強している。そんな厚い本読むのにいちいち質問できない」(IV)

これら二人の言葉から、専門の勉強を始めてから一番困ることは日本語の漢字の読み方がわからないことであることがよくわかる。日本語の読み方さえわかれば、和英辞書をひけば、意味がわかるのである。

4-4 まとめと考察

インタビューによって、いままでほとんどみえなかった、センターを巣立っていったあと専門の研究を始めた学生たちの姿が見えてきた。そこには当初は慣れない日本の先輩後輩関係にとまどい、難しい日本語の専門用語と格闘するたくましい学生たちの姿があった。

学生は先輩後輩という研究室のシステムにとまどうだけでなく、それまで習ってきた教室の中の日本語と教室の外の日本語に戸惑うことがインタビューを通じてわかった。教室の外で使われている日本語には敬語や方言があり、さらには親疎による言葉の使い分け、男女による言葉の使い分けがある。突然そのような環境の中に放り込まれるのであるから戸惑わないはずがない。現在、研修コースにおいて、敬語の早期からの導入を試みたり、方言や若者の日本語についても少し触れている。しかし、それでは不十分で、教室の中と外をつなぐような系統だった教材を作成することが必要なのではないかと思われる。

専門のレポートや発表の準備の際には、研究室の人々の手助けを受けていることも多いようだが、日本語の勉強に関しては研修コース修了後、一人でこつこつとさまざまな工夫をしながら日本語の勉強を続けている者が多いことがわかった。センターとして、補講コース以外にも何か個人的に日本語の勉強を手助けするシステムを作ることができるのではないだろうか。

今回のインタビューにより専門の研究が始まったあと、日本語の必要性が非常に高いことがわかった。その中でも印象に残っているのは「漢字の読み方さえわかれば……」という学生の声である。そこで、それを受けて、センターとしてまず取り組んだことは、専門用語の読み方が調べられるものを作成することであった。具体的には『水産学用語辞典』（日本水産学会編 恒星社厚生閣 1989年）に出ているすべての専門用語の読み方が総画と部首からわかるような冊子をファイルメーカーを使って作成した。これは実際に学生に試用してもらい改善を重ねて行く予定である。これは、水産学を専門とする学生を対象としたものだが、今後、この成果をふまえて他の専門の学生の

ためにも同じようなものを作成していきたいと考えている。

また、2000年前期より、研修コースのコンピュータのクラスで、専門の語彙を自分で調べる練習をする予定である。このことによって、初級段階から、それぞれが必要な専門語彙を身につけることができ、自分で専門語彙を増やしていくことができるようになるであろう。

5. 支援体制

研修コースを修了した学生は留学生センターの所属を離れ、各学部にも所属し、各専門の研究室で大半の時間を過ごすことになる。センターに所属している間は、学生は何か問題があれば、センター教官や事務官にすぐに相談することができた。またセンターサイドとしても、学生は常に目の届く範囲にいて、必要があれば、すぐ援助の手を差し伸べていた。ある意味では“過保護”といってもいい状況にあったかもしれない。いったん専門の授業や研究が始まると、留学生センターでの日本語の授業を受講することのできる学生は限られてくる。また、問題があっても、留学生センターまで足を運ぶことのできる学生は少ない。留学生を継続して支援していくためには、学内・学外とのネットワーキングを進め、協力体制をとっていくことが必要である。

5-1. チューターについて

国立大学では、学部・大学院に所属する留学生に対して、彼らの留学目的がスムーズに達成されるように、学部生については入学後2年間、大学院生および研究生については1年間、それぞれチューターが配置されることになっている。

長崎大学では、チューターの選出はそれぞれの留学生の指導担当教官によって行われ、通常チューターは留学生が所属する研究室の大学院生（先輩）が当たっている。研修コースに所属する留学生については、コース修了後、大学院研究室に所属してから1年間チューターが配置される。

センターではチューター制度が円滑に機能するように、チューターマニュアルの作成および改訂を行ってきた。また、留学生課と共同で4月にチューターオリエンテーションを開催している。チューターに対するアンケート調査も留学生課の協力を受けて実施した。⁷⁾

第一回目のアンケート調査の結果を見ると、チューター制度は特に問題な

く機能しているように見られたが、今回の研修コース修了生に対するインタビュー調査の結果から、実際にはまだ多くの問題を抱えていることが明らかになった。

5-1-1 チューターがいた（いる）かどうか

チューターがいた（いる）	: 14名
チューターがいなかった（いない）	: 12名

「いた」と答えたものの内訳

- ・半年だけチューターがいた : 2名
- ・最初の5ヶ月はチューターが誰かわからず、最後の1ヶ月になってチューターが分かった : 1名⁸⁾

修了生のチューターは全員同じ研究室の日本人学生であった。

「いない」と答えたものの内訳

- ・チューター制度の存在を知らない : 3名
- ・チューターという言葉をはじめて聞いた : 2名
- ・同じ研究室にチューターがいることはわかっているが、誰だかわからない。 : 1名

「チューターはいなかった（いない）」と答えたものは、全体の46%にも上る。

5-1-2 チューターに会った（会っている）頻度

毎日会う	: 8名
一週間に1～2回会う	: 4名
あまり会わない	: 2名

「毎日会う」と答えたものについては、チューターが同じ研究室であるという理由からで、毎日専門の研究等についての援助を受けているという意味ではないようである。

また「あまり会わない」と答えたものは、以下のような理由を挙げている。

「実験が違うので」(Ⅳ)

「チューターは今故郷に帰っているから」(Ⅳ)

「チューターはいる。でもそんなに頼っていない。何でも自分でやりたいし、決めたいほうだから。時々彼女は忙しい。邪魔をしたくない」(Ⅳ)

5-1-3 チューターに助けてもらった(もらっている)こと

専門の研究に関すること	: 7名
日本語に関すること	: 6名
生活に関すること	: 2名

上記の内訳であるが、「日本語に関すること」と答えたもののうち、4名は大学院入試の準備のための日本語であった。英語の勉強を助けてもらったというものも1名いた。⁹⁾

専門のテーマ・研究内容に関しては、チューターに限らず、同じ研究室の先輩や先生に聞く学生が多いようである。

これに対して、日常生活に関することで相談したり援助を受けている者は、2名のみである。うち1名は「困ったことは何でもチューターに相談している。アパート探しも手伝ってもらった。遊びも一緒に行くし、いい友達だ」(Ⅱ)と答えた。

5-2 専門の研究で困ったことや聞きたいことがあるときはどうしているか

5-2-1 誰に援助を求めているか

指導教官	: 10名
同じ研究室の人(先輩、助手、学部4年生)	: 16名
指導教官の秘書	: 1名
留学生センターの先生	: 1名
日本語教育クラブの学生 ¹⁰⁾	: 1名

上記の内訳であるが、「チューターがいない」と答えた12名のうち、4名が指導教官に、7名が研究室の人に聞くと答えた。残り1名は指導教官の秘書

に援助を求めている。全体では、指導教官と同じ研究室の人のどちらにも聞くと言ったものが3名いた。

留学生にとって指導教官との関係の善し悪しが留学が成功するかどうかの一番のカギであると思われる。インタビュー調査の範囲内ではおおむね良好なものが多いようである。

ただ、「指導教官が非常に忙しく、本当は自分の指導教官に相談したいのだが、直接先生に相談するのは無理なので、研究室の人や他の先生（助教授）に聞く」（Ⅱ）という者もいた。指導教官が常に直接指導するというよりは、研究室全体で指導・支援体制をとっている場合もあるようである。

「研究室の仲間や先生に聞く」（Ⅱ）

「研究室の人に聞く。3つのチームで研究している。チームの人ならだれでも教えてくれる。することは違うけど、みんな知っている」（Ⅲ）

また、インタビューの中で、質問する相手として「先輩」という言葉を使ったものが多かった。日本の大学の研究室の先輩・後輩のシステムになじめない者もいるようだが、インタビュー結果を見ると、先輩・後輩のシステムが支援体制として機能しているようである。

5-2-2 どんな援助や情報を求めているか

専門の研究のテーマや内容に関するもの	: 6名
研究生活を送るうえでの事務的な事柄に関するもの	: 1名
実験に関するもの	: 1名
専門の内容自体というよりも、日本語に関する問題 (専門用語の漢字の読み方など)	: 4名

調査結果から、専門の授業は日本語で行われることが圧倒的に多く、特にゼミは日本語のみで行われる場合がほとんどであることがわかった。専門の内容そのものというよりは、日本語自体が問題となっていることも多いようである。

「授業などをテープレコーダーにとって日本人の研究室の友達にもう一度聞いてもらって助けてもらう。修士や4年生。漢字の読み方を教えてもらう」（Ⅲ）

しかし、当然のことながら、日本語について日本人の学生に聞いても分からない場合もあるようである。

「時々日本語教育クラブの学生に聞く。日本人の学生もわからなくて困ることがある」(I)

日本語の問題は日本語の先生に聞くという回答もあった。しかし、これはセンターを訪ねる余裕のある学生に限られている。

一方、英語が母語ではないが、英語が堪能な留学生が多い。通常の相談業務を行う中で、「日本人学生の英語の練習のために研究室では英語で話すように先生（専門の指導教官）に言われたので、いつも英語で話している。日本語を話すチャンスがない」という訴えをしばしば受けることがあった。しかし、修了生の中には、これを同等の立場でお互いに助け合っているのだと考え、自発的に行っている者もいるようである。

「研究室の人に聞く。日本人の学生は英語のことをわたしに聞く。ギブアンドテイク」(II)

5-3 日常生活で困ったことや聞きたいことがあるときはどうしているか

5-3-1 誰に援助や情報を求めているか

指導教官	: 10名
同じ研究室の人	: 16名
留学生（同国、同文化圏、同期やその他の留学生）	: 11名
留学生センターの先生	: 4名
元チューター	: 1名
会話パートナー ¹¹⁾	: 1名
アパートの管理人さん	: 1名
大家さん	: 1名
学外の外国人	: 1名
学外の日本人の友人	: 1名
ホストファミリー ¹²⁾	: 1名

日常生活で助けや情報を求める相手は、専門の研究の場合（5-2-1）に比べ、広範囲にわたっている。同じ研究室内、学内にとどまらず、学外にもその対象が広がっており、また、それを意識的に追究してさえいる。たと

えば、ダンス教室や合気道の道場に通うなどして、趣味を通して、自ら積極的に地域にネットワークを広げているものもいる。また、母語や英語を教えることを通して、人間関係を広げているものもいる。

「ここに来てからいろいろな友達ができた。日本人も外国人も。僕よりここに長い間住んでいる人。今すごく親しい日本人の家族がいる。スペイン語を習っている人で久留米に住んでいる。とてもいい関係になった。今もスペイン語を教えている。わたしと奥さんも自宅に教えに行く。赤ちゃんは友達のうちに頼んで」(Ⅱ)

また、援助を求める対象として、同じ留学生（留学生で在日年数が自分より長いもの、同期の留学生、同国人の留学生）が多く挙げられた。

5-3-2 どんな援助や情報を求めているか

一番大変だったのは最初の6ヶ月で、今は生活をするうえでの問題はあまりないと感じている学生が多いようである。実際にはいろいろあるのだろうが、来日当初とは違い、自分の力で、もしくは来日後、少しずつ広げてきたネットワークを使って、毎日の生活の中で自然に解決していつている姿がうかがえた。

しかし、その中でも、具体的な問題としてでてきたのは住居に関することである。アパート探し、保証人、部屋の保険、部屋の設備などに関することが挙げられた。

また、日本語に関する問題もでてきた。たとえば「ゴミの出し方を書いてある紙が読めない」(Ⅰ)「子供が学校から持って帰ってくるお知らせの内容がわからない」(Ⅱ)というようなことである。

日常生活を送るうえで、会話に関してはほぼ支障をきたさなくなっても、読むことに関しては、やはりまだ多くの学生が問題を抱えているようである。

5-4 まとめと考察

以下、上記の調査結果から、既存の支援システムの改善および補強とこれから構築していく必要があると思われるシステムについて考察する。

(1) チューター制度

既存の支援システムとしてまず挙げられるのが、チューター制度である。チューターの選出は現在留学生課で一元化されており、書類上では該当する

留学生すべてにチューターがついていることになっている。しかし、インタビュー調査からもわかるように、一応名前は挙げられているが、実際には特定のチューターはおらず、研究室全体で対応するようになっているところもあるようである。それがうまく機能している場合もあるが、責任の所在がはっきりせず、留学生は実際には質問したいことがあっても遠慮して聞けなかったり、他に頼ったりする場合もあるようである。やはり、誰がチューターであるか、留学生に対してははっきりさせたいうえで、研究室全体でサポートするという方向が望ましいと思われる。

インタビュー調査の結果をもとに現在までに次のような改善のための努力を行った。

チューター制度にはまだまだ問題があることがわかったので、第2回目のチューターに対するアンケート調査を実施した。その結果、チューターが提出した報告書の内容が実際の実施内容と一致していない場合があることが判明した。これをもとに、2000年4月実施のチューターオリエンテーションでは、新チューターに対して、チューターマニュアルに2回目の改訂を加えたものを配布するとともに、本インタビュー調査の結果を踏まえて、チューターの役割について詳しい説明を行った。また、チューター制度の概略を説明する英文の文書を留学生用に作成して、チューターに配布し、担当留学生に手渡すように指示した。さらに、その文書を留学生用掲示板にも掲示した。

(2) 会話パートナープログラム

チューター制度を補強するものとして、留学生センターで実施しているものに会話パートナープログラムがある。チューター制度は国立大学において制度化され、謝金が支払われるが、会話パートナープログラムはセンターの出した募集広告を見て、日本人学生が自発的に応募するもので、謝金は支払われていない。また、チューターの立場は支援者であるのに対し、会話パートナーは支援者であると同時に学習者でもあり。お互いに学び合うという視点を基本に交流を行う。また、会話パートナープログラムは日本語でのコミュニケーション能力の向上と異文化理解をその目的の中心に据えている。

会話パートナープログラムは当初はチューターの配置がない研修コースに所属している学生のためのプログラムであったが、現在では全留学生を対象に実施されている。しかし、まだ全体によく周知されていない状態である。

日本人学生が日本語の問題に対処するには、日本語についての一定の専門的な知識が必要とされる。会話パートナープログラムのメンバーとして登録し、留学生のパートナーとして継続して活動している日本人学生は、留学生と会話をする場合のストラテジーを身につけてきている。チューターの配置期間は終了したが日本語の支援はまだ必要だという留学生に対して、会話パートナープログラムが生かせないかと思案中である。

(3) 支援のためのネットワーキング

専門の研究で助けを求める相手は、学内の人間関係にとどまっていたが、日常生活の問題に関しては、学内の人間関係に加えて、学外の人間関係も非常に重要な役割を果たしていることがわかった。また、同国人、外国人の友人関係のネットワークの重要性を再認識させられた。

センターとしては、留学生の同国人グループを把握し、さらに緊密な連携体制を築いていくことが必要であろう。また、チューターや会話パートナーだけではサポートが難しい留学生家族の問題など、地域の国際交流グループと協力し、ホストファミリープログラムを充実させるなどして、解決を図っていくことが必要なのではないだろうか。

6. おわりに

インタビューの内容で印象的だったのは、来日当初の右も左もわからない状態から研究室の新しい人間関係の中で、たくましく適応していく姿である。センター教官にとっては、来日時や研修コース受講時の学生の姿が忘れられないだけに、日本語能力だけではなく、いろいろな面での成長ぶりに目を見張ることも多かった。特に研究生から大学院生となって一年を経過した学生については、日本語力の向上とともに、留学本来の目的である専門の研究に邁進できることで、精神的にも充実している様子に感動を覚えた。

インタビュー調査の結果から、これまでの研修コース改善の方向は間違っていなかったこともわかった。しかし、そのことで安心してしまわずに、学生のニーズにさらにふさわしいものにするよう、努力を続けていきたい。

このインタビュー調査をきっかけに新しく取り組み始めたことも決して少なくない。たとえば、『水産学用語辞典』の専門用語の読み方が調べられる冊子の作成、チューターオリエンテーションの改善などである。それらの成果

は全学の留学生に還元されるはずである。専門の研究をはじめた学生たちがぶつかる困難のなかには、専門性が高く、直接的には留学生センターの守備範囲を越えることもあるが、留学生センターとして、援助できることが何かははっきりしてきたことも、調査の収穫であった。なお、今回のインタビュー調査は研修コース修了生を対象としたものであったが、今後、全学の留学生を対象とした調査を行い、留学生が求めていることをさらに追求していきたい。

註

1) 定員に余裕があれば、その他の留学生も受け入れている。

2) たとえば、以下のものがある。

助川泰彦・福島悦子 (1992) 「日本語研修コース修了生に対する追跡調査」『東北大学日本語教育研究論集』第7号pp.106-129

佐藤尚子 (1999) 「千葉大学日本語研修コース修了生調査報告1」『千葉大学留学生センター紀要』第5号pp.96-134

名古屋大学留学生センター (1994) 『日本語研修コース修了生追跡調査報告書』

名古屋大学留学生センター (1996) 『日本語研修コース修了生追跡調査報告書2』

名古屋大学留学生センター (1998) 『日本語研修コース修了生追跡調査報告書3』

次のものはケーススタディーである。

村岡英裕他 (1997) 「日本語研修コース修了生に対する第1回追跡調査報告」および同調査報告「その1」「その2」「その3」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』創刊号 pp.3-44

3) 全対象者は、教員研修を終えた等の理由ですでに帰国していた学生をのぞき、31名である。このうち、連絡が取れなかったり多忙だったりして、5名の学生のインタビューを行うことができなかった。他大学へ進学したものについては、筆者らが訪問した。

4) 第1期のみ『技術研修のための日本語』を主教材として使用した。

5) 「日本語演習I」については以下に詳しい。

松本久美子 (1999) 「留学生と日本人学生の初級会話合同クラス」『長崎大学留学生センター紀要』第7号pp.1-33

6) 「漢字クラス」については以下に詳しい。

奥村智紀 (1999) 「表語性に重点をおかない漢字指導—入門期の実践を中心に—」

『長崎大学留学生センター紀要』第7号pp.45-62

- 7) 第1回チューターアンケートは1998年9月に、第2回は2000年3月に実施した。
- 8) この学生の場合は1年を通して同じチューターが配置されたのではなく、半年ずつ違うチューターが配置されたようである。
- 9) この学生は経済学部の研究生である。経済学部は大学院入学試験を受けるための前提条件として、TOFELの受験と日本語能力試験1級の受験を課している。
- 10) 日本語教育クラブは長崎大学の日本人学生のクラブで、週1回留学生の宿舎で留学生のために日本語の会話のレッスンをやっている。
- 11) 留学生センターでは会話パートナープログラムを1998年4月（研修コース第4期）に開始した。このプログラムは留学生と日本人学生がお互いの都合のいい時間に都合のいい場所で会って、基本的に日本語で会話をしながらお互いのコミュニケーション能力を高めていくことを目的としている。
- 12) 長崎県国際交流協会が毎年10月に留学生に対するホストファミリープログラムの募集を行っている。特に、10月期に来日する学生にはこのプログラムを紹介し、参加するように薦めている。

(*留学生センター講師、**同助教授)

資料1 -

「質問項目」

1. どうして日本に来ようと思いましたか。
2. 日本にくる前に日本語の勉強をしましたか。日本語の勉強をしようと思ったら、教材は十分に手に入る状況でしたか。どんな教材が入手可能でしたか。
3. 研修コースで16週間日本語を集中的に日本語を勉強しました。いろいろなクラスがありましたね。どうでしたか。どんなところが、どんなことがよかったですか。詳しく話してください。いらなかったクラスやいらなかったことがありますか。現在のあなたの状況も考えて、研修コースでもっとしてほしかったこと、これからの人のためにしたほうがよいことがありますか。
4. 「専門の発表」はその後、役に立ちましたか。
5. 研修コースで日本語を勉強していたとき、研究室に通っていましたか。研究と日本語の勉強の両方をしていましたか。
6. センターで勉強していたとき、クラスメイトとの関係はどうでしたか。その関係は今も続いていますか。
7. センターで勉強していたとき、よかったことや困ったことがあったら教えてください。それをどうやって解決しましたか。センターのときとその後では、これらのことが変わりましたか。
8. 今も日本語の勉強を続けていますか。
9. 研修コース終了後、日本語はどのくらい必要ですか。たとえば、研究室でいつも日本語を使っていますか。先生と話すときはどうですか。教室のほかの人と話すときはどうですか。授業やレポートはどうですか。
10. 研究室のシステムが分からなかったり困ったりしていることがありますか。国のシステムと違いますか。
11. 研究室での人間関係で困っていることがありますか。国の研究室での人間関係と違いますか。
12. 研究室の設備はどうですか。
13. その他専門の研究で困っていることがありますか。
14. 専門の研究でこまったことや聞きたいことがあるときはどうしていますか。

か。

15. チューターがいたのは、いつからいつまででしたか。チューターとはよく（週に何回ぐらい）会いましたか。会っていますか。チューターにどんなことを助けてもらいましたか。助けてもらっていますか。チューターがいてよかったですか。
16. 日常生活で困ったことや聞きたいことがあるときにはどうしていますか。
17. コンピュータを使った日本語学習プログラムを利用したことがありますか。利用したいと思えますか。研究室のコンピュータに日本語のプログラムをインストールして自由に勉強できますか。
18. あとどのくらい日本にいる予定ですか。
19. 時間があるとき（暇なとき）何をしていますか。
20. 長崎大学から他大学へ移ったことで困ったことやよかったことがありますか。
21. 長崎にある公共施設（たとえば、図書館、プール、テニスコート、体育館、地球市民広場など）を利用していますか。どういうものがあったら、利用したいですか。利用するとき困ったことがありますか。
22. 会館の生活はどうでしたか。設備はどうでしたか。
23. 図書館の資料、設備、本は充分ですか。
24. その他、生活面などで困っていることがありますか。
25. 長崎に同じ国の人はいますか。長崎大学だけですか。
26. 同じ国の人だけの集まりがありますか。あれば詳しく教えてください。
27. あなたの宗教を教えてください。
28. ふだんお祈りはどうしていますか。
29. 定期的に集まりがありますか。
30. ラマダンのとき集まりがありますか。（イスラム教の人）
31. 肉や魚の購入はどうしていますか。（イスラム教の人）
32. ラマダンのときどうしていますか。（イスラム教の人）
33. 日本に来ていつ、初めて同じ国の人に会いましたか。来たばかりのとき、同じ国の人にどんなことを助けてもらいましたか。
34. 何が一番ストレスですか。インテンシブコースのときと今。
35. どうやってストレス解消をしていましたか。いましていますか。
36. 日本に来てから差別された経験がありますか。

37. 日本へ来てから一番うれしかったこと、一番悲しかったこと（落ち込んだこと）は何ですか。

38. いい日本人の友達はいますか。

資料 2 -

各期のスケジュール

第 1 期 (1996年度後期)					
	月	火	水	木	金
I	主教材 1	主教材 3	主教材 6	主教材 8	主教材 12
II	主教材 2	主教材 4	主教材 7	主教材 9	主教材 13
III	伝統文化	主教材 5	日本語演習 I	主教材 10	主教材 14
IV	スポーツ	社会と文化 (英語)	コンピュータ	主教材 11	日本語演習 II
第 2 期 (1997年度前期)					
	月	火	水	木	金
I	主教材 1	主教材 3	主教材 6	主教材 9	主教材 12
II	主教材 2	主教材 4	主教材 7	主教材 10	主教材 13
III	日本語演習 I	主教材 5	主教材 8	主教材 11	主教材 14
IV	スポーツ	社会と文化 (英語)	コンピュータ	日本語演習 II	伝統文化
第 3 期 (1997年度後期)					
	月	火	水	木	金
I	主教材 1	主教材 3	主教材 6	主教材 9	主教材 12
II	主教材 2	主教材 4	主教材 7	主教材 10	主教材 13
III	日本語演習 I	主教材 5	主教材 8	主教材 11	主教材 14
IV	スポーツ	社会と文化 (英語・選択)	コンピュータ	日本語演習 II	伝統文化
第 4 期 (1998年度前期)					
	月	火	水	木	金
I	主教材 1	主教材 3	主教材 6	主教材 9	主教材 12
II	主教材 2	主教材 4	主教材 7	主教材 10	主教材 13
III	日本語演習 I	主教材 5	主教材 8	主教材 11	主教材 14
IV	コンピュータ	社会と文化 (英語・選択)		日本語演習 II	伝統文化
第 8 期 (2000年度前期)					
	月	火	水	木	金
I	主教材 1	主教材 3	主教材 5	主教材 7	主教材 9
II	主教材 2	主教材 4	主教材 6	主教材 8	主教材 10
III	日本語演習 I	作文	漢字	日本語演習 II	主教材 11
IV	コンピュータ ^{A*}	コンピュータ ^{B*}		伝統文化 (随時)	

*: コンピュータクラスは、ABとも同じレベルで、学生はどちらか 1 回に出席することになっている。